書き抜き読書ノート 2460	2021 年 12 月 6 日

伊集院静著「ミチクサ先生(上)」講談社 2021 年 11 月 15 日刊を読む

1．「どうしたのかね？浮かない顔をして」

金之助は、毎日のように家に来る寺田寅彦がいつになく沈んでいる姿が気になって声をかけた。

寅彦は後に東京帝国大学に進学し、首席で卒業をしたほどの勉強家だった。かと言って勉強ひと筋のガリ勉タイプではなく、金之助が俳句を愉しんでいるのを見て、ぜひ教えて欲しいと申し出た。のちに牛頓（ニュートン）などの俳号を持ち、俳書まで出版する好奇心のかたまりだった。

同級生に言わせると、寅彦の頭脳は人並み外れているらしく、試験のための暗記も、予習、復習もいっさいしなかった。授業だけで十分だ、とすべてを記憶し、また物理学教授の田丸卓郎と地球物理学の討論をするほどだった。

2．「君らしくないじゃないか。妻が心配をしていましたよ」

「…実は先日、教頭から呼びだされて叱られました」

「ほう、どんなことでかね？」

「俳句などにうつつを抜かさず、きちんと勉強をしろと、そうでないと帝国大学へ行ってもついてはいけないぞ、と」

話を聞いて、金之助は自分にも教頭の叱責に責任があるような気がした。

実は、寅彦に俳句を教えると、すぐに俳句をする生徒が増え、しきりに運座までしていた。寅彦は別として、学校側からすれば一般の学生は勉学が疎かになると心配するのもうなずけた。

3．「君と仲間の成績は下がったのかね？」

「いいえ、むしろ皆やる気満々です。しかし先生、ひとつのことを成し遂げるには、やはりそれだけを懸命にやるのが大切なのでしょうか？」

『日本経済新聞』2021年6月5日朝刊連載小説挿絵

4．寅彦の真剣な顔を見て、漱石は静かに話しはじめた。

「私はそうは思わないね。寺田君、ここに座ってみたまえ」

ハ、ハイと応えて寅彦は濡れ縁の金之助の隣りに腰かけた。

「君の目指すところが、さしずめ、あの築山のてっぺんだとしよう。なら誰もが真っ直ぐここからてっぺんにむかって歩くはずだ。でも私は、そんな登り方はつまらないと思うんだ」

「つまらないんですか？」

「ああ、オタンコナスのすることだ」

そう言って金之助は笑った。

「真っすぐ登るのはオタンコナスですか？」

五高はじまって以来の優等生の寺田寅彦は金之助の顔をじっと見て訊いた。見られている金之助もかつて、一高はじまって以来の秀才と呼ばれたことがあった。

5．「そうさ、つまらない。そういう登り方をした奴には、あの築山の上がいかに愉しい所かが、生涯かかってもわからないだろうよ」

「ではどう登ればいいのでしょうか？」

「そりゃ、いろんな登り方でいいのさ。途中で足を滑らせて下まで落ちるのもよし。裏から登って、皆を驚かせてやるのも面白そうじゃないか。寺田君、ボクは小中学校で 6 回も転校したんだ」

「どこもつまらなかったからですか」

「いや、皆、それぞれ楽しく、いろんなことを学ぶことができた…」

　金之助は、本郷界隈から通った錦華小学校や、二松学舎の長机を並べた畳の表が破れた教室での授業を懐かしそうに思い出していた。

6．「いろんな寄り道ができて面白かったよ」

「寄り道ですか？」

「道草でもいいかな？」

「みちくさですか？　先生がそんなふうになさったとは想像もしませんでした」

「いろんな道の端で、半べソを掻いたり、冷や汗を掻いたりしていたんだ。〝我楽多〟とか〝用無し〟と呼ばれたこともあった。その時は少し切なかったし、淋しい気持ちになったが、そんな私をちゃんと守ってくれたり、手を差しのべてくれる人がいてね。その人の温りで寝た夜もあったよ」

「先生のみちくさは愉しそうですね」

　寅彦が金之助をまぶしそうな顔で見つめ、目をしばたかせていた。

7．「意外と、私は自分の来た道を認めたいのかもしれないね。江戸っ子特有の強がりかもしれない」

「先生」寅彦が呼んだ。

「何だね？」

「ボク、少し力が湧いて来ました。みちくさをしてみたくなりました。物理学にも俳句があった方が良い気がします」

「そうかね、そりゃ、楽しみだ。一高に米山保三郎君という親友がいてね。彼がこう言っていた。わかりきったことをして何になる？あちこちぶつかりながら進む方がきっと道が拓ける、とね」

　金之助は寅彦を見て静かにうなずいた。

P262 ～ 265

＜コメント＞

　伊集院静著、日経新聞連載、夏目漱石の日々をつづった「ミチクサ先生」の第五高等学校時代の教え子寺田寅彦との会話。貝原益軒の「楽訓」にも通じる漱石の生き方。コロナ禍の今こそ、このような生き方が必要かも。御参考に。

2021 年 12 月 6 日　林明夫記